

日蓮大聖人御書全集

ほうおんしょうおくりぶみ

報恩抄送文

新版
262
ゝ
263

ほうおんしょうおくりぶみ

報恩抄送文

けんじ

ねん

建治2年('76)

がつ

7月26日

にち

55歳

さい

浄顕房

じょうけんぼう

ごじようた

そうら

お

御状給び候い畢わんぬ。

しんそ

ほうもん

もう

こころ

い

ひと

言

親疎となく、法門と申すは、心に入れぬ人にはいわぬこ

そうろう

おんこころえそうら

とにて候ぞ。御心得候え。

ごほんぞんず

まい

そうろう

ほけきよう

ほとけ

ざいせ

御本尊図して進らせ候。この法華経は、仏の在世より

ほとけ

めつご

しょうほう

ぞうほう

ぞうほう

まつぼう

はじ

も仏の滅後、正法よりも像法、像法よりも末法の初めに

しだい

おんてきつよ

よし

おんこころ得

は、次第に怨敵強くなるべき由をだにも御心えあるならば、

にほんこく

ほか

ほけきよう

ぎようじや

みなひとぞん

日本国にこれより外に法華経の行者なし。これを皆人存じ

そうら

候いぬべし。

どうぜんごぼう　ごしきよ　よし　い　つき　うけたまわ　そうろう　じしん

道善御房の御死去の由、去ぬる月ほぼ　承り候。自身

そうそう　さんじよう　ごぼう　遣　そうら

早々と参上し、この御房をもやがてつかわすべきにて候

じしん　ないしん　そん　ひとめ　とんせい

いしが、自身は内心は存せずといえども、人目には遁世の

み　そうら　やま　い　そうろう

ように見えて候えば、なにとなくこの山を出でず候。こ

ごぼう　ないないひと　もう　そうら　しゅうろん

の御房は、また内々人の申し候いしは、「宗論やあらんず

もう　じつぼう　分　きようろんとう　たず

らん」と申せしゆえに、十方にわかちて経論等を尋ねしゆ

くにぐに　てらでら　ひと　数　多　遣　そうろう　ごぼう

えに、国々の寺々へ人をあまたつかわして候に、この御房

駿　河　くに　とうじ　きた　そうら

はするがの国へつかわして当時こそ来つて候え。

またこの文は随分大事の大事どもをかきて候ぞ。詮な

ふみ ずいぶんだいじ だいじ 書 そうろう

ひとびと 聞 悪 そうろう

からん人々にきかせなば、あしかりぬべく候。また、た

数 多

そうら

外 様

聞

といさなくとも、あまたになり候わば、ほかざまにもきこ

そうら

おん

あんのん

そうら

え候いなば、御ため、またこのため、安穩ならず候わん

か。

おん 前

ぎじようぼう

ふたり

ごぼう

読 手

かさ

御まえと義城房と二人、この御房をよみてとして、嵩が

森 いただき

に

さんべん

こどうぜんのごぼう

おん 墓

いっぺん

もりの頂にて二・三遍、また故道善御房の御はかにて一遍

読

たま

ごぼう

預

たま

常

よませさせ給いては、この御房にあずけさせ給いて、つねに

ごちようもんそうら

度

々

そうろう

こころ付

たも

御聴聞候え。たびたびになり候ならば、心づかせ給う

そうら

こと候いなん。恐々謹言。

きようきようきんげん

しちがつにじゅうろくにち

七月二十六日

きよすみのごぼう

清澄御房

にちれん

日蓮

かおう

花押